

保護者の申出に対して関係職員で協議し、内容の改善に取り組んだ事例

特別支援学校（知的障害）の児童が居住地の小学校の 図画工作を中心に取り組んだ交流及び共同学習

○概要

本事例は、B特別支援学校（知的障害）小学部に在籍するA児（3年生）が行った、居住地のC小学校における交流及び共同学習についての事例である。A児は交流及び共同学習を経験したことにより、指差しや発声で工夫しながら自分の要求を周囲に伝えるようになった。また、すぐに教員に支援を求めるのではなく、周囲の児童の活動の様子を見てまねることで活動内容を理解するようになった。交流学級の児童については、A児が困っていることはないか、どのように関わればよいかを考え、工夫しながら共に活動するようになった。

A児は、制作を好み、絵を描いたり素材を切ったり貼ったりする活動に集中して取り組むため、交流及び共同学習の授業は、3年生で学習する内容の中から、A児の興味を考慮した題材を設定することで、見通しをもって活動に取り組むことができた。事前学習では、「してみたい。」という気持ちを表現し、活動への意欲をもち、当日の活動の流れを確認したり道具の操作に慣れたりした。交流及び共同学習当日は、活動内容や交流学級の担任の話を理解して授業に臨んだ。交流及び共同学習を通じた、交流学級の児童との関わりが、A児のもつ力を十分に発揮することにつながり、また、お互いに協力しながら活動に取り組むことにもつながった。

1. 対象児童について

A児 : B特別支援学校小学部3年生（知的障害）

2. 活動のねらい

A児は友達や教員との関わりを好む。A児のスキンシップの方法として、相手の首に手を回して関わろうとすることが多い。そのため、相手の肩を優しくたたいて遊びたい気持ちを伝えることや、呼名をすることなど、適切な関わり方や相手との距離感についての指導を行っている。A児は、言葉で意思や要求を伝えようとする場面が増えているため、表現方法を伝えたり絵カードを見せながら言葉掛けを行ったりして、語彙を増やすことに取り組んでいる。様々な活動の中で、困ったときには「助けてください。」や「お願いします。」、活動後には「できました。」と教員に伝えることで、場に応じた表現方法で教員に伝えるようになってきている。また、自分の意思や要求に答えてくれたことが分かれると「ありがとう。」と相手に伝えるようにもなった。

交流及び共同学習を実施するに当たり、A児の保護者から、通常の学級の児童と一

緒に学習することが初めてなので、本人の負担にならないような交流及び共同学習を実施してほしいという申出があった。また、2回目の交流及び共同学習でのA児の様子を見て、3回目はよりA児が理解できる学習内容を考えてほしいという申出もあった。そこで、事前・事後協議では双方の学校関係者及び合理的配慮協力員により、申出の内容をもとに話し合いを行った。協議した内容については保護者に説明し、合意形成を図った上で当日の活動を行うようにした。

3. 事前の取組と配慮

A児が通常の学級で授業を受ける際の教科や授業内容を設定するに当たり、3年生が学習する内容の中から、A児の興味を考慮した内容を事前協議において検討し、当日までに事前学習を行った。始めに、A児にスケジュールを提示しながら活動の流れを説明し、見通しをもつことができるようにした（写真1）。音楽では、交流学級で取り組んでいる手遊び歌や歌に合わせて身体を動かす活動を増やした。また、じゃんけんをするときに使用するカード（写真2）を見せ、カードを使ったじゃんけんの練習を行った。図画工作では教科書から、段ボールを好きな形に切ったり、好きなところに切り目を入れたりして組み合わせ、立体を作っていく題材を取り上げた。段ボールカッターを使用する授業であったため、事前学習で段ボールカッターの操作に慣れる時間を確保した。また、あらかじめ段ボールを扱いやすい大きさに切って提示することで、活動しやすいように配慮した。総合的な学習の時間では、A児が何度も取り組んだことがあるボウリングと、ピンに貼る絵を描く活動を組み合わせた。また、タブレット型端末（写真3）を用いてスケジュールを提示することで見通しをもつとともに、次の時間に必要な物の準備や移動をスムーズにした。

A児は、初めて会う人や大勢の人の前に立つことに抵抗感があるため、当日、安心して活動に臨めるよう、自己紹介を書いた手紙を交換した。A児には、写真を見ながら一緒に過ごす交流学級の児童達のことを伝えた。

A児への関わり方や距離感について、事前学習で交流学級の児童に話をして理解を促し、向かい合って活動するような座席の配置を行い、同じ班の児童がA児の手本となったり、A児が活動内容を理解する切っ掛けとなったりするよう、A児が安心でき



写真1 音楽のスケジュール



写真2 音楽で使用した絵カード

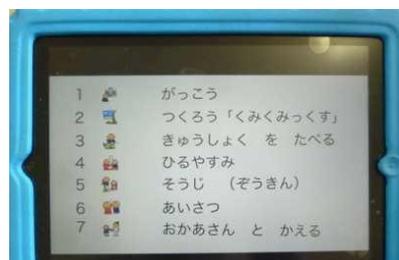


写真3 タブレット型端末を使ったスケジュールの提示

る環境づくりに配慮した。

また、B特別支援学校からC小学校に対して、障害理解活動の一環として、交流学級の児童が活動後に振り返りシートを使って活動の振り返りを行うよう依頼した。A児と活動するときを気をつけることを記入する欄を設けることで、交流学級の児童がA児の立場に立ち、必要な支援や関わり方を考える機会となるようにした。

4. 活動の様子と成果

当日は、A児が活動内容を理解していたことで、積極的に道具の準備をしたり活動を開始したりした。活動内容が分からなくなったときにはスケジュールを確認したり教科書を見たりして、A児自身が手掛かりを探しながら活動することができた。

A児は絵を描くことなどの制作が好きで、ペットボトルに貼る絵を描く活動を取り入れたことで、描きたい題材を指差して周囲の児童に伝えていた。活動内容が比較的簡単であり、活動の流れを理解していたので、「切ってほしい。」「ここに貼ってほしい。」という気持ちを伝えることができていた。

3回目の交流及び共同学習では、事前学習で道具の扱い方に慣れていたことと、A児自身が交流学級の児童と一緒に活動することをとても楽しみにしていたことで、色々なサイズの段ボールを自分で探し、切り目の位置や切り込みの深さを考えて切っていた。A児は周囲にいる教員に支援を求めるのではなく、「ここに切り目を入れて組み合わせてほしい。」という気持ちを周囲の児童に伝えていた。同じ班の児童もA児の意思を確認しながら活動に取り組んでいた。自分たちで考え、お互い協力しながら一つの作品を作っていく様子が見られた。

音楽の手遊び歌では、教科書を拡大コピーしたものをホワイトボードに貼ることで、A児を含め児童全員が注目しやすい教材を提示した。交流学級の児童が前で手本となる動きをしている様子を見ながら教科書を拡大コピーしたものを同時に見ることができたので、A児は活動内容を理解し、意欲的に手の動きを合わせようとする姿が見られた。ペアの児童が手を差し出して手を打つタイミングを伝えたことで、徐々にタイミングが分かるようになり、活動がスムーズになった。また、タイミングが合うようになると笑顔になり、声を出して喜び、交流学級の児童と楽しさを共有していた。ペアの児童とじゃんけんをする活動があったため、グー、チョキ、パーの絵カードを使ってじゃんけんをした。A児は何回かじゃんけんを繰り返すことでじゃんけんの意味が理解できるようになり、積極的に絵カードを選択するようになった。

また、図画工作の時間のほかに、給食、昼休み、掃除を一緒にする予定になっていたため、タブレット型端末を用いて、スケジュールの確認を行った。A児がスケジュールを確認している姿を見て「次は給食だね。」などと言葉を掛けている児童がいた。タブレット型端末の利用は、A児と交流学級の児童の関わり方の切っ掛けにもなった。授業中はA児と関わることはなかった児童がA児と共にタブレット型端末を見るこ

とで、次の活動に移る際、一緒に行動する児童が増えた。

活動の中で、A児が困っていることに気付いた児童が、何で困っているのかを聞き出そうと言葉掛けをしている児童の様子を見て、ほかの児童が「A児が分かるように言い方を変えないといけない。」と気を付けることを伝える場面が見られた。また、給食や掃除の時間には、交流学級の児童が「一緒にしよう。」とA児に声を掛けて行動したことで、A児が活動を理解することができ、互いに一緒に活動することを意識しながら行動することができた。

交流及び共同学習の事前学習を行ったことにより、A児が安心して授業に臨むことができた。また、学習内容の変更・調整も有効に働き、A児が力を発揮しながら活動に取り組むことができた。さらに、A児は、自分の要求が伝わるまで繰り返し伝えようと指差したり、自分が要求した後に児童のしたことが違っていたら、首を横に振って「違う」と伝えたりして、主体的にコミュニケーションを取る様子が見られた。最初は、A児のすぐそばで活動している児童を中心に要求を伝えていたが、徐々に要求を伝える相手が増え、多くの児童と関わるようになった。

A児と共に活動を行う中で交流学級の児童の成長も確認することができた。学習を重ねるごとに、A児の言いたいことを分かろうと耳を傾けたり、「〇〇ということかな。」と声に出してA児の気持ちを確認したりする児童が増えた。積極的に手をつないだり、横に並んで行動したりする児童もいた。

5. 事後の取組、今後の課題

交流学級の児童を対象とした活動後の振り返りシートには、「優しい言葉で言う。」「優しく、笑顔で接する。」「丁寧な言葉で言う。」「分かるように、早口で言わない。」など、それぞれの児童がA児に関わるときに気を付けていることがあり、工夫しながら関わっていることが分かった。交流及び共同学習を重ねるごとに、A児が理解しやすい言葉を選んで端的な言葉掛けをするようになった。A児からの発信を受けて関わっていた児童が、徐々にA児の様子を見て言葉掛けや関わり方を考えるようになり、更にA児に積極的に話し掛けて一緒に行動するようになった。こうして、多くの児童がどの場面においてもA児の立場に立って物事を考えられるようになってきた。

C小学校の教員についても、交流及び共同学習の実施時だけでなく、日頃からタイムタイマーや活動スケジュールを使用し、分かりやすい授業を心掛けるようになり、日常の学習場面では、活躍の場が少ない児童に目を向け、全体の中で個を生かすよう意識するようになった。

交流及び共同学習を終えて、来年度もこのような交流を続けていきたいという保護者の希望を聞くことができた。保護者の希望を踏まえた上でC小学校の交流学級の担任とも話し合いながら、今後もA児のニーズに応じた合理的配慮を取り入れた交流及び共同学習を検討していきたいと考えている。